それから

平井　龍

それから

●前編

第一章　それから

平井龍は夕陽が丘の夏祭り会場にいた。

陽が沈むまではもう少し時間がかかりそうな蒸し暑い夕方のテントの中に座っていた。首にタオルを巻き付けてサングラスをかけて黒色のTシャツ姿は龍のいつものパターンだ。

龍は今年も企画担当から外れることもなく夏祭りに関わってはいた。しかし、七月中旬に母を亡くしたばかりだった。まだ心の悲しみが癒えないうちに迎えた今年の夏祭りは、プレイヤーとして参加する予定もなくやはり寂しいものになっていた。

龍は「音楽で地域の活性化を図っていこう」といえば恰好はいいのだが、もともとは自分達のバンドが参加できる場を求めて今まで夏祭りに力を注いできた。去年の夏を最後にブルーアトラスを抜けてからは音楽活動をまるでしていなかったし、それ以来ポッカリと心に穴が空いたままになっていた。

そんな中、今年の夏祭りもいつものように数バンドが参加して五時にスタートしていた。

中学生、高校生バンドも出演して子ども達のバンドも定着してきた。緊張感を失った龍は特に何をすることもなくＰＡの加納さんのテントに役員席から移ってきてステージを眺めていた。

「平井さん～、今年は出られないんですか？」と手をギターを弾く真似をしながら、見知らぬ男の人がニコニコしながら声をかけてきた。

やせ気味の濃い顔立ちのその人に龍はまったく見覚えがなかった。

「は、はい。失礼ですが、どちらさんでしたっけ？」

「安東といいます。去年の夏祭りにうちの子供が小学校のバンドでお世話になって。あの時に平井さんと少しお話しをしたんですが…お忘れですよね」

「いやぁ～、そうですか…すいません」　龍はペコリと頭を下げた。

「いやぁ　私も音楽が大好きで。平井さんにあこがれていたんですよ」

「今年から中学校の活動を少しやっているものですから、中学生にもなんとか音楽をやらせたいと思いまして。その時はご協力してください」

「はい。いいですよ」

「吉田会長とはよく地域のことで色々話しているんですよ。平井さんのこともよく出ますよ」

「あっ、噂をすればですね。こっちに来ますね～」

「吉田会長～」と安東さんは手を挙げて声をかけた。

「ありゃ、珍しい二人で…」といいながら、会長も手を挙げてニコニコしながらやってきた。

吉田さんは、龍のマンション群の町内会の会長を一昨年からやり始めていた。

今年の連合町内会の夏祭りは企画を担当することになったらしく、龍に夏祭りの企画運営のことで相談を持ち込んでいた。

人なつっこい性格で誰にでも気軽に話しかけるので、町内会長には適役ではあった。龍より二つ年上であった。

「何の話しをしてたんですか～？」吉田会長は意外なツーショットに興味があったようだった。

「いや～、バンドでも始めますかっていう話しをね…」

安東さんがニコニコしながらいうと

「えっ本当ですか？　ぜひ私も仲間にいれてくださいよ～」

吉田会長は本気にしたみたいだった。

少し、三人で立ち話しをして、また二人はそれぞれの落ち着く場所に移っていった。

今年の夏祭りは、連合町内会の役員が大きく変わったこともあって新しい企画の意見もなく、例年通りのスケジュールですんなりと決定したようだ。企画担当になった吉田会長は以前のゴタゴタは知らないし、音楽関係については龍に全てお任せで自分は残りの部分のことを決めていた。そんなことで、吉田会長と龍は打合せをすることが多く最近急に会う機会が多くなっていた。

龍は町内会の役員ではなかったので会議に出て意見を述べる機会はない。それでもいつの間にか夏祭りの時だけの特別な存在になっていた。そんな立場の龍が夏祭りの音楽のところを動かしていることを知っている新しい町内会の役員はほとんどいなかった。

蒸し暑さがようやく心地よい風に変わり、8時を過ぎて音楽ステージはラストを迎えた。

そして恒例になった花火も打ち上げられて今年の夏祭りも無事に終わったのだった。

龍はＰＡの加納さんの片付けをバンドのメンバーと一緒に手伝ってから家路についた。

もう夏の日差しもすっかり秋の気配に変わった頃、龍は久しぶりに吉田会長にバッタリ会った。

「その節はお世話様でした～」

「ところで、あのあとに安東さんと会ったんだけど、一緒に歌いたいって言ってましたよ」

「あぁ～、あの人も音楽は好きそうな感じでしたよね。低音で雰囲気は演歌っぽいけど…」

「いや～、じつは私もやりたいんですよ…」

「へぇ～、会長も楽器やるんですか」
「はい、ギターならコード押さえてポロロン～くらいは…」
「安東さんもギター弾けるらしいですよ」

「我々の年代は昔ギターをちょっとかじってまして～が多いから。私もまぁ、そんな感じですがね」
「今度、時間作って三人でやってみませんか?」

「えぇ、いいですけど、ギターはもってるんですか?」
「古いけどフォークギターはありますから。やるんなら新調しようかな～」

会長はどうもその気になってるみたいだった。

しかし、龍はあまり乗り気ではなかった。バンドは面倒くさい。もう少し休んでいたいのが本音でまだその気になるには時間が必要であった。
ただ、軽くギターを弾いて歌う仲間がいてもいいっか～、くらいの気持ちは少しあった。

新たに何かが始まる瞬間というのはワクワクするものだが、特別な気持ちもなく「そのうちね～」という約束のない話しではあった。

第二章　始まる

その後も会長からはちょくちょく電話がかかってきていた。

「平井さん、吉田です」

「この間、安東さんに会ったら、フォークギターを買ったって言ってたよ」

「あらら、頑張っちゃったみたいですね～。そうですか…。」

「ところで、今度の日曜日にちょっとやりませんか?」とギターを弾くポーズをした。

突然の誘いであった。

「そうですね～、市民センターですか?…予約は?…」

「あ～、そっちの方は私に任せてもらえばいいですから…」

三人で何をやるとか、何を目指すとか、何もないまま、とにかくギターを持って集まろうということになってしまった。龍は押しに弱くて、気がすすまなくてもはっきり断れないところがある。

約束の日曜日の午後。久しぶりの市民センターにギターをもって出向いた。

「あら～、平井さん久しぶりです～」
「今日はギター持って～。またやるんですか～」事務の佐藤さんだった。

「こんにちは。ちょっと遊びにきました」
「吉田さん、予約してますか?」
「あぁ～、吉田会長と一緒ですか～」

二階の会議室に予約をしていた。ここもブルーアトラスの時に何度か借りて練習したので、龍は懐かしかった。

五十代半ばのおっさん達が三人集まった。
バンドの経験者は龍だけ。吉田さんはほとんどギター初心者。安東さんは少し弾けるくらいだけど歌には自信がある様子だった。「この間の会社の慰安旅行でカラオケで優勝して～」と自慢していた。たしかに低い声でいい声はしていたが、フォークはどうだろう?と龍は思っていた。

「何やりますかね～?」と龍はもっていった楽譜の本から適当にギターを弾きながら歌い出した。
すると、二人も一緒について歌い出す。
「いいですね～。それ好きなんですよ」

「やっぱり、いいなぁ～。フォークは～」

そんな感じで数曲やったが、ギターの方はとにかくバラバラ。吉田さんは「え～と、そのコードは…」と指を探しながら押さえるので、歌う余裕はない。そのうち、「ギターはあとで練習して、私も歌います～」

龍は結局は二人の伴奏をやる羽目になってしまった。なんとなくこんなふうなことになってしまいそうな気がしていた。

二時間くらい時間が経ってから「コーヒーにしますか～」とギターをおいた。

話しはもっぱら地域の話し。町内会の話し、中学校の荒れてる話し、等々で、これから音楽活動をどうしていこうなどという話題は出なかった。やはりたまにこうして懐かしいフォークソングを歌って楽しめれば…、そんな感じであったのだろう。

「今度は飲み会でもどうですか?」吉田さんがいいだした。

「いいですね～」安東さんも乗り気だった。

「平井さんもイケルんでしょ」と手で飲む真似をして安東さんがニヤッとした。

「いや～、それが、あまり…だめなんですよ。酒の方は…」

今日の二人の話しを聞いていても、龍はついていけないと思った。町内会の運営とか中学校の問題とか、龍にはあまり興味のあるものではなかった。

あくまでも龍にとっては音楽ありきの町内会であって、町内会の運営とかあの人がどうとか、そういう面倒な話しは龍の不得意とするところであった。それでも、付き合い程度は…というのが龍の本心であった。

「じゃ、今度町内会の気の合う人達を呼びますので、ぜひ参加してください」

吉田さんの得意分野なのだろう。現在の町内会の役員たちとうまくコミュニケーションを図りたいのが、彼の本心かなと思った。そして音楽もその一つの手段なのかな?と龍は思った。

吉田さんと龍は、「音楽と町内会の存在」をお互い反対のことを思い描きながら接していたことになる。二人のその考え方がこの先ずーと平行線をたどることになるのだ。

第三章　飲み会

「平井さん。飲み会の話しだけど～」と半月もしないうちに誘いの電話が吉田さんからあった。

龍はなんとか理由をつけて断ろうとした。

「いつですか～?ちょっと、仕事がたて込んでて～」

吉田さんはお構いなく話しを続けた。

「平井さんに紹介したい人がいるんですよ。ウチの棟にいる人で八巻さんっていうんだけど。ベースギターのセミプロらしいんです。バンドの話しをしたら是非参加したいって。平井さんのことも知ってたよ」

「へ～、夕陽が丘は音楽やる人いっぱいいるよね～」

「この間、八巻さんも町内会の夜回り当番で参加してくれてね、その時にこの間の市民センターでの話しをしたら、いいですね～。私もやりたいなぁ～、ということになって…」

「そうですか～。まぁ、なんとか時間を作ってみます」とはっきりしない返事で龍は電話をきった。

次の週の日曜日の夕方六時から飲み会があった。龍は三〇分くらい遅れて行った。

吉田さん以外に知っている人は誰もいなかった。龍はこういう場は苦手だった。まして知らない人達ばかりの飲み会…すぐにでも帰りたい気分だった。ひとりひとり紹介された。

吉田さんの奥さん、他は全員町内会の現在の役員をやってる人達だった。

「八巻です」「総務の佐藤です」「山崎です」「後藤です」何故か男性は役職を言わなかった。

「どうも平井です。あれ安東さんは?」

「えぇ、安東さんは用事があってこれないって」

「あぁ、そうですか」

せめて、安東さんでもいれば龍も間が持てたのだが…。龍には、吉田さんの息がかかった町内会の集まりにみえた。「しまった〜」と龍は思ったがすぐに帰る訳もいかずビールをチビチビなめる程度に飲みながら最近よく分からない町内会の話しに付き合っていた。

龍はバンドの話しでもしないと暇で仕方がなかったので、話題をそちらにむけた。

八巻さんという人は龍の隣に座っていた。

四〇代の前半くらいの雰囲気のある人の良さそうないつもニコニコしていた。

龍はギターを弾く真似をしながら「八巻さんはセミプロだそうですね～」と聞いてみた。
「いや～」といいながら、手を横に振った。
「そんな人がバンドに入ったら心強いけど…このメンバーでは逆にイライラしません？」
「いいえ～、私も最近やってなくて、音楽をやれればいいな～って」
「そうですか～。ベースですよね」
「まぁ、なんでもやりますよ～」

甘谷さんもそうだったが、基本の出来てる人は色々な楽器ができる。たいしたものだと龍は思っていた。

「ゆかちゃんはトランペット吹くそうだよ」
と吉田さんが少し酔っぱらった調子でいいだした。
「あれ、それもすごいですね」と龍はいったが、バンドにトランペット…どういうふうに作っていったらいいのか見当がつかなかった。会長に「ゆかちゃん」と呼ばれた人は総務部長の佐藤さんで四〇代前半のハキハキした女性のことだった。

「後藤さんもベースやてたんですよね」と吉田さん。
「へえ～、すごい町内会ですね～」と龍は驚いてみせた。
「いや～、私は若い頃にファンクをやってて、キャ～、ワォーって大声で騒いでただけですよ。髪型は黄色に

してこうして立てて～」と頭に手をやった。

「山崎さんは、ピアノ弾くし～」とまた吉田さん。

随分とバンドの宣伝をして情報を得た様子だった。

「ねぇ、平井さん、このメンバーでやってみないですか?」

「はぁ～、皆さんやる気満々のようですね」

龍は迷っていた。また、バンドっか。まとめるのは大変そうだったが、

「いやぁ～、私の方で連絡とか市民センターの予約とか、いろいろまとめていきますから～」と吉田会長はリーダー役を買って出た感じだった。

龍はバンドの一員になってればいいのかなと、軽く受け止めればいいのかなと…そう思うようにして引き受けた。

「じゃ、やりますか～」ということで、町内会バンドが立ち上がることになってしまった。

第四章　練習開始

「今度の日曜日、二時～五時まで練習します」という吉田さんからの電話連絡が入った。
「皆さん来るそうなので、よろしく。市民センターの和室の方を予約しましたから…」ということだった。

さて、どうしよう。具体的なことは何一つ決まっていなかった。「行ってから決めればいいっか」と龍も皆目イメージが湧かなかった。

練習当日の市民センター二階和室。そこには懐かしい空気があった。数年前のブルーアトラスの初練習が想い出された。しかし、今の龍は当時とはまるで違っていた。

部屋に入ると、「今日は八巻さんと後藤さんは来れないって」と吉田さん。
結局は安東さんと吉田さんと奥さんと龍の四人だった。
「山崎さんとゆかちゃんは遅れて来ます～」と吉田さんが付け加えた。

最初の練習から集まりが悪い。「この程度のことかな…適当にやればいいっか」とすぐに熱くなりがちな自分を抑えようと思った。

「じゃ、どうします?この間のように歌いますっか～」と龍がきりだすと、

「そうだね～。安東さんは歌いたい曲はないですか?」と会議調に吉田さんが聞いた。

とにかくここは吉田さんに任せようと龍は思った。奥さんもいることだし…。

「ウチのもあとで歌いたい曲があるそうなので…」と吉田さんはまた付け加えた。

結局は龍が歌いだす。その曲に二人が同調する…みたいなことで前半を終わった。

廊下の方が賑やかになった。山崎さんとゆかちゃんがきた。その後に三人の女性たちがついてきた。

「ここで、やってるんだ～」とザワザワと女性たちは部屋に入ってきた。

山崎さんはキーボードをもって、ゆかちゃんはトランペットをもってやってきた。

三人の女性たちも町内会の役員さんたちだと紹介された。吉田さんの宣伝効果なのだろうか。人を呼んでくる力はたいしたものだ。

山崎さんとゆかちゃんの準備ができたけど、何をやったらいいのやらまるで決めていない。もちろん楽譜の用意もない。手持ちぶさたの山崎さんは適当にキーボードの音を出している。

「ウチのが　花　を歌いたいんだって」と楽譜を取り出した。自然に流れはそちらに向いた。楽譜をみながら山崎さんがイントロの部分を弾いた。奥さんが歌い出した。龍はコードを弾いた。安東さんは一緒に歌っている。吉田さんも歌っている。

キーが高すぎて、歌にならない。「キーを二つ落としましょう」と龍が提案した。山崎さんはそこで止まってしまった。どう対応していいのか分からなかったみたいだ。「キーボードに変調する機能があるはずなんだけど…」と言いながら、結局は龍のギター一本で伴奏してまた歌った。

今度は吉田さんの奥さんが「あれ、ここどう歌うんだっけ…」　途中で歌も止まってしまった。

この練習を最後に吉田さんの奥さんは何故かはよくは分からないが練習にはこなかったし、歌うこともなかった。自信をなくしてしまったのだろうか。そして、ゆかちゃんのトランペットも一度だけ音を出したが、それ以来持ってくることはなかった。

バンドをやるには早すぎるメンバーだった。こうやって楽器を持ってきて適当に歌ったりしてるのが関の山だった。龍もこれではストレスが溜まると思ったし、このままではバンドとしての将来はないと思った。

ただ、最後に「白いブランコ」を歌ったときに、安東さんがメインで龍がハモッた。この時だけはいい感じだった。安東さんも歌い終わって「いい感じですね～」と興奮気味だった。

今日の収穫は、「白いブランコ」と、ゆかちゃんもキーボードが弾けることがわかったこと、バンドはまとめていくのが大変だと吉田さんに分かって貰えたこと…そんなところであった。

後片づけをして、外に出る頃にはもう暗くなっていた。
みんなぞろぞろと同じマンションの敷地内に帰える途中に、
「オレ、ギター自信がないからドラムにしようかな～」と吉田さんがポツンと言った。
「えっ、叩けるの？」と驚いた龍は聞き直した。
「いえ、ドラム教室に通ってみようと思うんだけど…」
「う～ん。結構大変かもね～　ドラムっか…」
「だって、ギターもボーカルも私の出る幕なさそうだし…。ドラムはまだやる人いないし…」
「まぁ～ね」と龍は次の言葉が出てこなかった。

ドラムを習うきっかけはどうでもいいのだが、自分の存在場所を求めてのドラム教室…気持ちが分かるような、そこまでしなくても…という思いで肩を落としながら龍は家路についた。

第四章　ドラムを買ってきた。

一度目の練習からひと月半は、シーンとしていた。もう十二月の暮れを迎えようとしていた。
「バンドは無しかぁ～」と淋しいようなゆっくりしたような…そんなところに…

「平井さん、ドラム買ったよ」と吉田さんから電話がきた。
「え～！　本当に？」
「ドラム見てもらいたいんだけど」
「それはいいけど、叩けるの？」
「あの後、ドラム教室に通ってるんだよ」
「へぇ～！」吉田さんには驚くばかりである。

ドラムのお披露目を兼ねて練習をすることになった。とはいえ一体どこから始めればいいのか…。吉田さんから具体的な話しはなかった。

このバンドは、吉田さんが集めた吉田バンドだから、決めるのは自分ではないと龍は思っていた。しかし、このままだと終わってしまう。せっかくの楽器も宝の持ち腐れではもったいない。やっぱり自分が今までの経験で引っ張っていくしかない。それが龍の結論だった。

いまのメンバーでやれるのは、ボーカル兼サイドギターを安東さんと自分。ベースギターを八巻さんか後藤さん、キーボードを山崎さんかゆかちゃん、そしてドラムが吉田さん。

そして選曲をしてみた。ツインボーカルだから、アリスから入るのはどうだろう。「チャンピオン」「今はもうだれも」「冬の稲妻」このあたりかな。あとはGSかな…と龍は考えていた。

そして二回目の練習日。市民センターに行ってみると、真新しいドラムが運びこまれていた。ドラムは八巻さんがセッティングをしていた。吉田さんはそこのところもよくまだ理解していなかったみたいだ。八巻さんはさすがに詳しくて音の調整もやってくれた。というか少し自分でもドラムが叩けるようであった。これはいい先生がついて、なんとかなるかもしれない。

龍は、自分の考えをみんなに伝えることにした。パートのこと、選曲のこと、そして一番伝えたかったのは現場のリーダーのことだった。技術的なところは八巻さんに任せ、連絡その他は吉田さん、現場監督は自分がやっていくと話した。みんなそれでいいと賛成してくれた。そして、「目標は来年の夏祭り」と宣言した。

「え～、夏祭りにでるの～　できるかなぁ～」とみんな不安な顔をした。

「大丈夫だよ。そのくらいの気持ちでやらないと…、ねぇ、八巻さん」

「そうですよね…」とニコッとした。

あまり、自分の意見を主張しない人だ。

吉田さんのドラム教室はいきなりエイトビートから入ったらしい。ひと月半の成果は出てはいたもののリズムはバンドの命、ドラムとベースがしっかりしていないと音楽が進行しない。一定のリズムを刻んでいくのは大変な作業だ。手と足と同時に動かすドラム…吉田さんはドラムセットの真ん中に座って満足そうにニコニコしていた。たしかに存在感は一番ありそうだ。

あとは、ダブったパートだ。ベースの二人はやはり八巻さんが別格だった。後藤さんも最初は曲に合わせて弾いていたが、途中で座り込んで下にある楽譜をながめていた。まるで、あの日の龍と同じだった。痛いほど気持ちがわかった。その日を最後に後藤さんは顔を出さなくなってしまった。

そして、山崎さんのキーボードは、ゆかちゃんが先生役になった。

これで、一応の整理がついた。あとは機材を少しずつ揃えて、龍が選曲したアリスの楽譜があれば、目標に向かって練習あるのみであった。ただ、基本的には「楽器を持ち寄って音楽を楽しもう」だったから夏祭りに出ようなんて思っている人はこの中にいるのだろうか…。

さて、なにはともあれ目標の夏祭りまであと七ヶ月。苦難の龍の音楽活動が復活したのだった。

第六章　本格的な練習

年が明けて間もなく、日曜日を中心にいよいよ本格的な練習が始まった。

この日は市民センターの二階会議室を二時から予約したと吉田さんから連絡がきていた。龍が会議室に入っていった時には吉田さんはもうドラムのセットを始めていた。

「こんにちは～。早いですね～。」龍はエレアコが入った黒いケースを肩にかけて、小さなアンプを二台両手に持って重そうに吉田さんに声を掛けた。

メンバーが揃って、楽器の最低限の用意も出来た。そして楽譜をコピーをして、まずはパート毎の練習に入ることにした。

会議室はまとまりのない音が鳴り響いた。

「安東さん、チャンピオンやってみますか?」と龍はギターを持ちながら、

「イントロのところは…、まずギター一本でやってみます…」

といいながら龍が四小節を弾いてみた。

「そして、ここからボーカルが入ります。一緒にベースとドラムも入ります。ちょっとそこのところまでやっ

てみますか～」

ジャガジャン　ジャガジャン　ジャガジャン　ジャガジャン

「つかみかけた～　あつい腕を
ふりほどいて　君はでてゆく～」

安東さんが渋い声で歌い出した。ベースも合わせてきた。とりあえずドラムもエイトビートを刻んだ。このまま間奏のところまで通してやってみた。

みんなの顔がいい顔になった。
「いいじゃん、いいじゃん…」
といいながら、龍はみんなを制して
「間奏はいよいよキーボードの出番で～す」といいながら山崎さんをみた。
山崎さんは楽譜とにらめっこしながら、間奏を弾きだした。
龍はギターでコードを弾いた。八巻さんもベースで合わせてきた。
間奏の最後の方は難しいので山崎さんはとちったが、
「まずはこんな感じで間奏が入って、二番のここから安東さんやりますよ～」

「ワン・ツー・スリー・フォー」と龍はカウントをとった。

「君はついに　立ち上がった
血にそまった　赤いマットに～」
安東さんがまた歌い出した。そしてエンディングまで…。
「ライラライ～ライラライ～　ライラライ～ライラライ～」
龍はハモッた。みんなの顔がまた、いい顔になった。

そしてエンディングへ。　ジャ～ン。　なんとなく、「チャンピオン」ができた。
「こんな感じで、あとは細かいところを確認しながら練習しますっか」と龍はとりあえずホッとした。

「やっぱり、ボーカル用のアンプがいるよね～。」
「ネットで調べてみるから…」吉田さんがそこは任せてという顔で言った。

バンドは少しお金がかかる。楽器、機材、練習場所代など。だから、買ってしまってからは簡単に解散という訳にもなかなかいかないのだ。

「今はもうだれも…やってみる?」と龍は安東さんに声をかけた。
龍はイントロのところを弾いて「これはいきなりハモるので、安東さんどっちがいいかな～」とハモリのところを龍が歌ってみた。

「ハモリのところの方が低いから安東さんはこっちの方がいいかも」ということで、龍がメインでバックを安東さんが歌うことにした。

ボーカル中心のバンドは、メロディーがわかっていればそれなりに進むのでやりやすい。伴奏も八巻さんのベースがリズムを刻むのでしっかりしていたし、あとはギターとキーボードで和音を流していけば、それなりに出来る。やっぱり大変なのはドラムなのだ。吉田さんの頑張りに期待するしかないのだが…。

初めての本格的な練習は五時に終わった。今日はそれなりにみんな満足そうな感じがしたし、具体的なことが見えてきてこれからの練習もきっと前向きになりそうな気配だった。龍は人に教える程の技術も知識もないと自分では思っていた。しかし、ブルーアトラス時代の経験はところどころに発揮することができると思う。八巻さんの技術力、ゆかちゃんも音楽を勉強したらしく、楽譜通りのリズムやテンポがが崩れると「違う、違う～」と大きな声を出していた。まだ笑顔だから安心した。

次回の予約を吉田さんが事務室の窓口でとっていた。

申込書の団体名の欄に吉田さんが書いた名称は「町内会音楽愛好会」になっていた……。

第七章　その頃の町内会は…

その後も「町内会音楽愛好会」の練習は隔週ぐらいに続いた。少しずつだが形になってきていた。

吉田さんのドラム教室はいつの間にかやめたみたいだった。でも、それなりには頑張って叩いてはいた。

山崎さんはゆかちゃんにハッパをかけられながら一生懸命に頑張っていたし、ゆかちゃんもキーボードを買ってツインキーボードになった。音の幅がぐ～んと広がった。

ボーカルは専用に簡易ＰＡセットを吉田さんがネットで探してみんなで買った。安いＰＡセットだったが、それなりのエコー効果もあって安東さんも龍もだいぶ声が出るようになった。

三月になって町内会の方は、来期の班長、役員選びなどで忙しくなってきていた。吉田会長も総務部長のゆかちゃんも会議が多くて大変そうだった。

ある日。

「平井さん、今度の町内会の役員に入ってくれませんかね」と吉田さんに頼まれた。

「あの～、ウチの班長の順番はまだ先だから…」と龍は手を横に振った。

「それはなんとでもできるんだけど、今度の連合町内会の夏祭りの役員に出てもらいたいんだよね…」

「今までも役員じゃないけど…なんとか…やれたからね～…」
「一応、ウチの町内会の役員ということで、連合に出席してもらいたいんだよ。そうすれば、夏祭りの会議に出てもらって、何かと意見を述べてもらいたいんだよね。」
「はぁ～…」
「実は、今の連合町内会長が都合で辞めるらしくて、私にどうかって打診があって…」
「そうですっか～。三丁目の会長さんだよね。どうかしたんですか?」
「平井さんは、詳しいよね。」
「まぁ、今までの夏祭りでいろいろやって付き合ってきたから～」
「それで、平井さんはずーっと夏祭りの音楽関係のところを任されてる訳だよね」
「そうだね。夏祭りのポスターやプログラムまで考えて作ってたから…、それなりに便利だったんじゃないのかな」
「なるほど。役員になればもう少し平井さんの立場もスッキリして、やりやすいと思うんだよね」
「町内会の役員ね～、ん～、仕事が増えるよね～」
「でも、平井さんの商売の方も増えるかもしれないし…」
「ん～、そこなんだよね。なんか町内会を利用して仕事をやるのが、気がひけてね」
「いやぁ～、それは遠慮いらないよ。私の方で平井さん個人でなく平井さんの会社の方に発注するという形だから、それは大丈夫だよ」

「う～ん。ちょっと考えさせてくれるかな～」

押し問答の末、とりあえず保留にした。

数日後、「吉田さん、町内会に企画部を作らない?」と龍はもちかけた。

「企画部ね。それはどんなことをやるのかな?」

「今の町内会は、毎年役員や班長が変わるから、毎年去年のことを同じように繰り返すことしかできないんだよ。マンネリ化してる。その辺りを企画部がフォローする、具体的な仕事を決めないで、他の部との連携で補佐をするような…そんなことを考えてみたんですけどね」

龍は、せっかく役員に入っていくなら何か今後に役になるようなことはないのかと…考えてみた。もちろん基本は音楽祭だった。役員になって連合町内会の会議の中で発言していけば「龍の音楽祭」の夢は大きく前進するかもしれない…。龍の本音はそこにあった。

「おぉ～、いいかもしれないです」

「さっそく、三役と相談してみるから…。その時は平井さんが企画部長だよ」と吉田さんは急に元気な顔になった。

余計なことを提案してしまったかな?と龍は少し後悔した。

何年か前に総務部長を急にやる羽目になってさんざん苦労をした。人間関係の難しさがこの近所にもたくさん存在している。仕事一本で過ごしてきた龍には地域の関係を深く考えたことなど一度もなかった。それが、事務所を自宅に置き、仕方なしに回ってきた班長会議に出て、そこで発言したことから総務部長になってしまい、当時の町内会長を補佐して…そこからバンドと町内会の関わりを強く意識して、夏祭りにバンドの発表の場を求め、企画書を提出して、いまこうして夏祭りの音楽の部分を一任させられている。

龍にとっては音楽活動と町内会は切っても切れない関係になってしまった。確かに、なんの役を持たない龍が組織の中で発言していくのは難しかった。利用してるようでうまく利用されている…そんな感じを持つこともあった。

もし、龍の企画部の提案が町内会で認められれば、言い出しっぺとしてやらざるを得ない。しかし、これからの音楽活動を続けるには龍にとっても悪いことではないのかもしれない。

さっそく、龍の企画部は認められて、来期の企画部長が決まってしまった。

第八章　夏祭りにむけて

今期の町内会の役員の顔ぶれが決まった。

吉田さんは町内会長再任、ゆかちゃんも総務部長再任、山崎さんは防犯防災部長、龍が企画部長とバンド関係者がそれぞれに役員になった。龍はなんとなく吉田ファミリーの一員になってしまったようで、居心地は良くはなかったし、町内の周りの目を気にしていかないとまずいなぁ～と思った。町内会役員が仲良しグループになってしまっては問題だと、吉田さんには釘をさした。

その後、吉田さんは連合町内会長に就任、毎週のように会議の日々のようだった。

六月になってようやく夏祭りの実行委員会が立ち上がった。もう来月下旬のことなのに人事関係でもたついたみたいだった。龍は夏祭りは何度か経験しているので余裕はあったが、初めての人は一体なにをやったらいいのか皆目見当がつかないようであった。

一回目の夏祭り実行委員会議。吉田さんは意見をまとめるのに四苦八苦していた。まだ全体の把握はしてないのか色々な質問にたどたどと応えていた。

「去年と同じようにやればいいんじゃないの」と面倒くさそうにいう役員もいた。

「だから、その去年通りがなかなかわからないんですよ」と神経質っぽい役員がイライラしながら意見をいう。

「去年の当番の会長さんに引き継いでもらって～」と吉田会長がいうと、
「いやぁ～、申し送りは文書でもらったけど、段取りがよくわからない…」とまた神経質っぽい役員が間髪入れずに話し出してなかなかまとまらない。
ここはやはりリーダーシップを発揮して、半分は命令的にやっていかないと前に進まない。
あれはどうする、これはどうする…。毎年こんな会議をやっていたのであろうか？

龍は会議ではっきりしておきたいことが一つあった。一通りのやりとりが終わったのを見計らってサッと手を挙げて発言した。

「私は、四年前に夏祭りに音楽をやったらということで企画書を提案しました。お陰様で了承していただいてここ三年間、音楽祭をやらせていただきました。」

「しかし、実行委員会の方からはそのこと自体が認めてもらえてるのかはっきりしません。実行委員会からのバックアップを感じたことがないからです。専門的な要素があって準備やら当日の進行させるのにはなかなか難しいのですが、せめて音楽の企画も実行委員会の中で大事なイベントとして扱って欲しい。以前は好きなヤツらが勝手にやっているというような感覚があったように思います。」

「皆さんにお聞きしたいのですが、夏祭りで行っている音楽はこれからも必要ですか？」

「えっ?あれはもう定着しているものと思っていましたが…。違うんですか?」
とふっくらとした白髪の何丁目かの会長が意見をのべた。

「大いに認めてますよ。これからもどしどしとやっていただきたい!」
とすぐ横に座っていためがねをかけた会長も同調した。

「はい。ありがとうございます。とっても心強いです。」

そうなんだ〜。定着してるのかぁ〜…
ここ数年間の苦労は認められているのか〜。誰かにはっきりと確認をしたことはない。龍が肌で感じていたものとは大分変わってきたのだ。連合町内会の役員の顔ぶれが変わったこともあるし、夏祭りでの音楽の部分がふくれ上がってきている。それは自然の流れだったのかもしれない。

龍は弁当とか、飲み物とかそんな話しもしたかったのだが、過去の話しはやめた。

この話しを出したのは、現状のバンド活動のこともあった。はっきりとした目的をもって練習をしていることを示したかった。やはり夏祭りまでにはなんとかしてこぎ着けないと…。龍は思いを強く持った。

先週の日曜日、バンドの練習が終わっての帰り際にこんな会話があった。

「夏祭りはやめた方がいいんじゃないの～」と言いだした人がいた。「自信がないし練習で楽しければそれでいいし、こんなに毎週練習することないんじゃないの」そんな意見だった。

龍はかちっときた。

「やめてもいいよ。仲良しグループでバンドをやる気はないから！」

「要するに目的が違っている！」と一喝したのだった。そして、温度差を感じたのだ。

市民センターの玄関口で靴を履き替えながらみんなシーンとなった。

「やりましょうよ。せっかくここまでやってきたんだから～」安東さんがいいだして、八巻さんも「んだね。やろ～」でその場はなんとかクリアはした。

結局、町内会のことでなかなか時間がとれない、他の用事もあるし、バンドは夏祭りにでることが目的ではなかったし…ということのようだった。

「とりあえず、夏祭りまでは…。」が龍の目標になった。

第九章　king of kings

「なんか、いいバンド名はないかな～」と龍がきいた。
予想通り誰もウ～ン？という感じであった。
パッと言われてサッと答えられるものではないけれど、バンドをやっていれば日頃なんか恰好いいバンド名はないかな～って少しは考えるものなんだけど…と龍は思っていた。

やはり気持ちは「町内会音楽愛好会」なのかもしれない。時間があるときに集まってその場を楽しくワイワイしながら音楽をやる。特に何かに出て人に聞かせようという感覚があまりないから緊張感もない。そういう集まりが悪いわけではないけれど、龍はそれなら…という気持ちではあった。
この間の「夏祭りに出なくても…」という発想がでてきてもおかしくはないのかもしれない。龍はあの時から「無理矢理やってもらっているのかな～、出なくてもいいっか～」と心のどこかで弱気にはなっていた。

それでも龍には決めていたバンド名があった。

「king of kings」だ。

「どうかな～、これ…。気に入ってるんだけど」

「おぉ～、チャンピオンだね。」とすぐ安東さんが反応した。
「そぉ、初めて練習した曲からとったんだけど。約してkin kinだよ」
「うん、いいね。」八巻さんも同調した。

八巻さんの意見は結構みんなには「そうだね」というふうになる。技術的な実力と町内会でのお付き合いがそうさせてるんだと思う。龍はそれはそれでコミュニケーションがとれればいいと思っていた。安東さんは町内会の役員でもなかったので、いつも少し遠慮していたのかもしれない。ただ、会長との関わりが強かったので存在感はあった。
バンドと町内会という二つの思いが絡み合って、「king of kings」はなかなか前に進むのが難しかった。それでも、夏祭りは刻々と迫っていた。

今回の夏祭りは、連合町内会長になった吉田さんが実行委員長。役割では企画担当の町内会だったから、龍の意見もかなりのところで取り上げられた。特に「音楽祭」に関わる出演者の交渉、音響さんとの打合せ、ステージの場所と作り方、照明など、龍が決めていった。吉田さんは全体のところがあったので、なかなか忙しくして手が回らなかった。

出演者は、元ブルーアトラスのメンバーたちにそれぞれ頼んだ。そして、町内にポスターを貼って出演者を募集すると、大人の二グループから電話連絡がきたのと、中学生グループが安東さん絡みで出演するこ

とになった。それと、中学校ブラスバンドが今年も出ることに決まった。小学生バンドは出演希望がなかった。しかし、総体的に充分なバンド数が出演することになった。

音響は今年も加納さんに頼んで、打合せも済んでいた。あとはステージの場所と照明だ。今年は広場の西側に三段くらいの階段があってちょうどいい感じの高さと広さのスペースがある。そこをステージにした。いつもはその前に役員のテントがあったのだが、テントを移動してもらった。そしてステージの前に椅子を十列×十段並べてまさしくここがステージだという雰囲気を作ることにした。ステージのバックには卓球台を立てた状態で壁を作って、音が逃げないで前に来るような工夫をした。

照明は町内会で防災用で準備していたスポットライトを借用。まぁ、夜になれば少しは役に立つかなくらいの代物ではあった。

プログラムとポスターの制作も龍が手掛けた。全体のスケジュール、音楽祭のスケジュール、もちろんキャッチからデザインにいたるまで龍が引き受けた。我ながらつくづく使い勝手の良い人だと龍は自分でも思った。

さて、夏祭り本番の「King of Kings」の演奏曲は、アリスで「今はもう誰も+冬の稲妻」「チャンピオン」「君の瞳は一万ボルト」GSで「想いでの渚」フォークで「戦争を知らない子どもたち」の五曲をやることにし

た。選曲はまぁまぁいい感じではあった。

当日の出番はトップの中学生のバンドが四時スタートだから、その次の四時半頃にした。まだ明るいうちに終わらせるスケジュールにした。メンバーがそれぞれに町内会の仕事をもっていたので早めにという配慮からだ。

夏祭り前日、市民センターの体育館を借りて最後の練習をした。それぞれ緊張感がでてきて、いい仕上がり状態ではあった。ようやくここまで辿り着いた感じだった。

その夜は興奮してなかなか眠りにつけない龍だった。

第十章　夏祭り当日前半

懐かしいメンバーたちが集まってくれた。元ブルーアトラスのみんなだ。

「へいさ～ん、ギター替えたすか?」ハナちゃんとソウちゃんがやってきた。

「どうも～、ご無沙汰～」ニコニコしながら甘谷さんだ。

「ヘイさん、よろしくお願いします」久しぶりの坂口さんだ。

「平井さ～ん、また呼んでもらって～」達ちゃんバンドのみんなだ。

今は、それぞれのバンドに別れて活動しているが龍の誘いにみんな快く集まってくれた。龍は感謝したし、ようやく自分もバンドで出演できるようになって同じステージに立てるのが嬉しかった。

甘谷さんは、ＰＡ、ステージの準備、テントの設営まで昼前から手伝ってくれた。本当に頼りになるヤツだ。甘谷さんには今日のリハーサルを仕切ってもらおうと思っていた。龍はリハーサルのスケジュールも作っておいたので、ＰＡの準備ができ次第「リハーサルは甘谷さんに任せるからよろしくね」とゲタをあずけた。

龍は、ステージ作りをやっていた。今年はステージの前に椅子席を設けることになった。その並べ方につい

ても、「平井さんどう並べますか?」と備品担当の会長さんが龍に聞きにくるくらいだった。随分と以前とは変わったものだ。

「十列にしてもらって、十段並べてください。とりあえず百席分用意しますので～。」

いざ並べてみると

「パラッとしてますよね～」

「十五列にしてもらって、横に広げて見やすくしますか～。」

「すいませ～ん。あと五十席追加してください」こんな調子だ。

あの何年前かの夏祭りで、今は亡き青山じーさんが扇子で龍を指さししながら「こらぁ～お前ら～なにやってんだ～」と血相を変えて走ってきた様子がフッと懐かしく想い出された。

リハーサルも順調のようだったが、坂口さんのバンドの一名が「秋田から出張でまだなんで、リハーサルはパスします」ということだった。それと今年はじめて参加するバンドもメンバーがまだ集まらないというのでパスした。

中学校バンドはリハーサルの時から飛ばしていた。安東さんは付きっきりであーだこーだと大声で檄をとばしていた。彼らには練習中もKiri Kiriの練習時間の合間に場所とアンプを提供したのだ。音楽を通じて

大人と中学生の付き合いがあったし、なかなか迫力のあるロックバンドだった。

その中学生バンドがトップバッターでいよいよ夏祭りの音楽祭が開幕した。

演奏が始まる頃には中学生の生徒達がいっぱい応援にきた。彼らの演奏は三曲だったがその興奮した顔には充実感でいっぱいだった。飛んで跳ねて汗を流して、若いスターたちは満足そうに歌いきった。安東さんは目に涙をいっぱい溜めて演奏し終わった子ども達と抱き合って喜んでいた。

そのあとが、いよいよ King of Kings の出番になった。龍は久しぶりのステージでワクワクドキドキ。さすが八巻さんは落ち着いていた。山崎さんとゆかちゃんは左端の後側にキーボードを二台でスタンバイ。龍の右隣に緊張で恐い顔をした安東さん。その真後ろに吉田さんのドラム。人前に出るのは慣れているのでニコニコしながらスティックをあげて聞きにきている人に挨拶をしている。安東さんの右隣に八巻さんという立ち位置だった。

龍はみんなの顔をひとりひとり見て「やるよ～」と目で合図した。

「ワン・ツー・スリー・フォー」龍のカウントで演奏が始まった。

一曲目はアリスの「今はもう誰も」に途中から「冬の稲妻」をくっつけて、最後にまた「今はもう誰も」に戻っていくというアレンジにした。龍のアイディアだった。安東さんと龍のハモリが売りのつもりだった。

声がうわずっている。テンポも早い早い。ドラムの音はほとんど聞こえない…。龍は歌いながら安東さんの顔をみて抑えようとしたが、安東さんは必死の形相で歌っている。気が付かない。

八巻さんはドラムに近づいて身体でリズムをとりながらベースを弾いていたがドラムのテンポも抑えがきかない。ついにそのテンポのまま終わってしまった。

「早い、早い～」と苦笑いしながら龍は安東さんの顔をみた。

大きな目はますます大きくなって、額には大きな汗の玉が吹き出していた。

「うん、うん」とうなずいていたが、龍の声はあまり耳には入っていないようだった。

おそらくバラバラな演奏になってると思う。いつも会議室で練習をしている時はお互いの音がよく聞こえるし顔も見える。ところがステージに立って、横並びになって演奏すると、返しのアンプも用意していないのでそれぞれの音が聞こえにくい。横並びだから顔の表情もわからない。真後ろの自分のアンプの音だけが大きく聞こえる…。練習の時と環境が変わるので焦りと不安が出てくる。

本番はどうしても気が焦ってテンポが早くなりがちにはなる。何度も何度も練習してもまぁ最初はこんなものだ。

気を取り戻したつもりの二曲目の「君のひとみは一万ボルト」もやっぱり早い。

三曲目「想い出の渚」のあたりで気持ちが落ち着いたのと歌いやすさがあってようやく練習の成果が出

てきた感じだ。

四曲目「戦争を知らない子供たち」は無難にいった。

いよいよラストに「チャンピオン」を選んだ。一番練習を重ねた自信作。龍はＭＣでバンド名の由来を語りながら「ワン・ツー・スリー・フォー」とカウントをきった。

ジャカジャカ　ジャカジャカ～

「つかみかけた～　あつい腕を

ふりほどいて　君はでてゆく～」

最後のライラライ　ライラライ～まで少し早いテンポだったが、間奏のキーボードもとちらずにいってまずまずのできだった。

大きく息を吐き出しながら、安東さんと顔を見合わせた。

吉田さんも山崎さんもゆかちゃんも八巻さんもみんないい顔をしていた。

少し、無理があったのはわかっていた。三曲くらいが無難だったのかもしれない。しかし、迫力には欠けたがまずは大きなミスもなく King of Kings の初ライブは終わったのだった。

第十一章　夏祭り当日後半

King of Kings の次が達ちゃんバンド。そして新しいバンドが二バンド、甘谷さんのバンド、坂口さんのビートルズがトリの予定だった。

ハナちゃんとソウちゃんは達ちゃんバンドの応援でやってきていた。ハナちゃんがドラムを叩いて、ソウちゃんがサイドギターを弾いていた。

達ちゃんバンドはさすがに安定した演奏でうらやましかった。

ハナちゃんがウチのバンドのドラムに入ったらなぁ～と龍は一人で思っていた。誘ったら必ず応援してくれるよなぁ～と思いつつ、現状はそれは許されないよなと自問自答しながら達ちゃんバンドの演奏を聞いていた。

達ちゃんバンドの演奏途中に次のバンドの人が申し訳なさそうに

「すいません。まだメンバーが揃わないんですけど、どうしますか?」といってきた。

「もうすぐ着くと連絡は来てるんですが…」

「そっか～　順番を変えて調整するしかないな～…」と龍は出演者の準備の控えにしていた卓球台の裏側に走っていった。

卓球台の壁の裏では急に慌ただしくなってきた。

龍は「さきにやってください」ともう1つの新しいバンドのリーダーに声をかけた。
急の変更で「えっ!」という顔をしたが、「いいですよ〜」とスタンバイしてくれた。

そのバンドが終わりそうになっても、まだ到着しそうにない。

龍は甘谷さんを探した。まだ卓球台の裏にはきていない。
会場をさがすと、椅子に座ってメンバーと坂口さんも一緒にバンド演奏を聞いていた。

「甘谷さん、予定変更。次やって〜」

「あや!まだこないのすか〜」と顔を曇らせたが、慌ててメンバー達と卓球台の裏に走っていった。

「ところで坂口さんの方は間に合いそうなの。秋田からくる人は」
「うん、さっき高速降りたって連絡きたから大丈夫だとおもいますが…」

龍は「甘谷さん〜、悪いけど予定より引き延ばして〜」とステージに立った甘谷さんに言葉をかけた。

「あぁ、いいの?」と少し微笑んだ。
「うん、あと途中で連絡いれるから…」

ケンケンケンケン、ドラムのカウントで甘谷さんのベンチャーズの演奏がスタートした。

予定より何曲か多く演奏はできるから良さそうなものだが…。
演奏後半から甘谷さんも段々不安そうに龍の方をみている。「まだ?」と口をパクパク言わせてる。
そろそろネタ切れかもしれない…。

そんなところに、坂口ビートルズの一人が汗だくになってやってきた。とりあえずビートルズは間に合った。
「OK!」と龍は手で輪を作って甘谷さんに伝えた。
ニコッとホッとしたような甘谷さんの顔で甘谷ベンチャーズの演奏が終わった。十五分延長した。

そして坂口ビートルズがステージに立った。今年も揃いの黒のスーツで登場。やっぱりうけた。会場は用意した椅子が足りなくて立ってる人が多くいた。「来年は倍用意だな〜」と思いながら龍は次のバンドの心配をしていた。

最悪は中止もあり得るかも…と思いながら卓球台の後に入ると

「いま来ましたから～」とリーダーが頭をかいた。

坂口ビートルズは暑い中での黒のスーツで汗びっしょりだった。

演奏が終わると「すいませんでした～」と遅れてきた人が謝りにきた。

「間に合って良かったよ～。ハラハラしたよ～」といいながら、龍は「盛り上がったよ。サンキュ」と礼を言った。

さて、トリだ。このバンドは初めて聞く。リードギターがプロらしい。さすがにまとまったバンドだった。それにドラマーの個性的な歌声は観衆を魅了した。ジャズフェスの常連という噂であった。

夕暮れ。ステージの後方の空は真っ赤な夕焼けで染まった。バンドマンの姿がシルエットになって、その光景に少し離れて見ていた龍は感動していた。

色々あったが無事予定のスケジュールは終わった。

第十二章　夏祭り反省

King of Kings の夏は終わった。

加納さんの片付けを手伝いながら、龍はまずはホッとした。今年は出演バンドの数も多くてトラブルもあった。しかし、終わってみればそれもスリルがあって楽しかったし、途中の判断もあれで良かったと龍は満足だった。

「ありがとうございました」と安東さんが礼をいった。きっと中学校のバンドのことだと思った。

「感激して、涙、涙だったね」と龍が言うと

「お恥ずかしいです。でも、本当に感動しましたよ～」とまた目頭を熱くさせていた。

それぞれのドラマがある。一緒にステージに立ちながらも、個々の思いがそれぞれに違う。その感動のきっかけになるために、みんな一生懸命に練習してその成果をぶつけた訳である。その場を作っていくことに龍はここ数年間奔走した。今年もいくつかの感動がうまれ、いい想い出ができた。

加納親子を見送って、あらためてみんなで万歳をして家路についた。

その後、King of Kingsは練習を休んだ。
秋の文化祭にも出ようという話しにはなっていたのだが、みんな夏祭りで燃え尽くした感じだった。文化祭の参加はやめることにした。

久しぶりに市民センターで練習をしていると、見知らぬ男の人がやってきた。

「こんにちは～。織田です」
「あぁ、どうも」と返事をしたのは安東さんだった。
「急ですいません、中学校の活動を一緒にやってる人で、バンドの練習見学を…」安東さんが説明をした。
「どうぞ。いいですよ～。聞いていってください」と吉田さんが答えた。吉田さんと安東さんとはそういう話しが通っていたようだった。

King of Kingsの練習は、アリスの新たな曲を増やそうといろいろ挑戦はしていた。それとGSをもっとやろうというくらいで足踏みしていた。もちろん目標は来年の夏祭りに設定していた。

安東さんが「この間見学にきた織田さんなんだけど…仲間に入ってもらって駄目ですかね～」といいだし

たのはそれから三週間ぐらいしてからだった。
龍は少しためらった。町内会関係と中学校関係…なにか団体のコミュニケーションに使われるバンドの存在…これでいいのかなと迷っていた。しかし、みんなの意見も賛成だったし、本人のやりたいという気持ちを断るのも悪いか…と結局は参加してもらうことになった。

「織田さんは、楽器は何をやるんですか?」
「はい、ギターを少々…です。」
龍はいきなり、リードギターの要求はどうかなと思ったが、織田さんの雰囲気を感じて話した。
「リードギターがうちにはいないんですよ…いいですか?」
「えぇっ　それは無理ですよ〜」
織田さんは手を横に振りながら
「端っこの方で　ポロンと弾いてる程度で〜」

それは謙遜であった。織田さんの腕前はなかなかのものであった。安東さんもそこまでの情報はなかったようであった。八巻さんと山崎さんとは同年輩ということもありすぐに溶け込んで、休憩時間になると音楽談義をしていた。
King of Kings は七人のメンバーにふくれた。リードギターが入ったこと、やりたい曲を同年輩の八巻さん、織田さん、山崎さんから出てきたこともあり、少しずつ新たな方向が見え始めていた。

年が明けて、春を迎える頃には King of Kings の持ち歌の数は飛躍的に増えていた。井上揚水の「夢の途中」、甲斐バンドの「ヒーロー」、アリスの「ジョニーの子守歌」など今年の夏が少し楽しみになってきた。

しかし、内容的にはまだまだひ弱な演奏が続いていた。吉田さんのドラムもなかなか進まず、八巻さんのコーチもいま一歩という感じであったし、安東さんと龍のボーカルも曲によっては無理があった。キーの違いがネックになっていた。

そしてその頃から、安東さんは個人的なことで悩み苦しんでいた。いろいろ相談は受けていたが我々には踏み込めない部分が多く、解決するには至らなかった。

第十三章　king of kings　二度目の夏祭り

安東さんは心の苦しさをまぎらすために歌を歌っていたのか、夏祭りの練習には欠かさず顔を出していた。しかし集中は出来ていない様子だった。少し痩せたのかそれでなくても大きな目がギラギラした感じがした

「ヒーロー」と「夢の途中」はいい感じに仕上がっていた。特に「ヒーロー」は今年の夏祭りのキャッチフレーズに龍は考えていた。

それに、アリスの「ジョニーの子守歌」も大体出来ていたし、バンドとしての準備は着々と進んでいた。

しかし、安東さんの悩みはますます深まったまま夏祭りは間近にせまっていた。

今年の夏祭りも昨年と同様に吉田会長が実行委員長になって、単体町内会も企画担当になった。龍は企画部長として全体の企画と音楽のところを任されていた。変更したところは、昨年のステージが夜になって暗すぎたという反省から広場の階段の最上階、市民センターの前をステージにした。バックには卓球台を十数台並べて通路とステージを遮断した。充分な広さと照明が明るいことがあって、演奏はやりやすかった。しかし、聞く人達は上を見上げるような状態になってイマイチかなと龍は心配した。

毎年、夏祭りは企画はもちろん、色々と試行錯誤しながらやってきた。音楽祭のステージもなかなか「こだ！」という場所が決めかねていた。夜の照明まで考えると大変な作業ではあった。

それでも夏祭りは今年も当たり前のように開催された。龍にとっては関わってから何度目になるのだろう…随分とやっている。

今年もＰＡの加納さんは家族とやってきた。自慢の娘も中学生になって大きくなった。

「年々盛大になるよね～」と驚いていた。全く最終目標はどこにあるのだろうか…。

龍はking of kingsをトリにした。その訳は「ヒーロー」にあった。夏祭りのキャッチを「夏だ！ヒーローになれ！」にしてラストにこの歌で締めたかった。龍の演出だった。安東さんを送る歌になれば…とも考えていた。

最後の出番をステージの袖で待っていたメンバーはガチガチになって震えが収まらないようだった。初めての織田さんはもうやめてしまいたいような感じだったし、安東さんも手をブルブルと震えさせていた。

さて、いよいよ出番だ。「エイエイ、オッー」とみんな輪になって手を重ねた。そして、中央ステージまで。みんなに「今年はトリだよ」と話した時、「えぇ～…」と驚きながらもみんなニコッとした。それだけ練習も積んだし、これが最後になるかもという気持ちの入れ込みもあった。

七人のメンバーは横に広がった。ステージが広いので人数的にもバランスが良かった。

「チャンピオン」からスタートして、中半に「夢の途中」、ラストの「ヒーロー」まで、選曲はかなり自信があった。観客を飽きさせない曲がずらりと並んだ。これで解散してしまうにはもったいないくらいにKing of Kingsは成長していた。

演奏は他のグループに比べるとイマイチではあったが、それでもトリに恥じない演奏が続いた。

最後の「ヒーロー」は泣けた。安東さんは目に涙をいっぱい溜めて声を振り絞って歌いきった。

ここに立ってる者だけしか分からない何とも言えない空間、スローモーションのように流れる時間。そして、エコーがかかったようにいつまでも響くギターの音。みんなの顔が誇らしげにみえた。

終わった。　おもいおもいに楽器と機材を片付け始めた。

提灯の灯りも落とされて会場は市民センターの玄関と事務所から漏れる蛍光灯の明かりだけになった。

誰も何もしゃべらない。

誰もこれからの話しをしない。

間違いなく、この2年間で king of kings はうまくなった。しかし、町内会の仲良しグループからは脱しきれないところが残った。

龍は今が良いタイミングかもしれないと思っていた。ツインボーカルを意識した選曲は龍にも心地よいものではあったが、安東さんの脱退が決まってから、また立ち上げるには少々エネルギーを必要とした。

その後は、練習を再開することもなく king of kings は静かに解散した。